

地学基礎，地学

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

地 学 基 礎

1 前 文

「地学基礎」は、地球環境の変化、日本の自然環境とその恩恵や災害など、日常生活や社会との関連を図りながら、地球や地球を取り巻く環境に関心をもたせ、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する科目である。

評価に当たっては、共通テストの趣旨である、「大学に入学を志願する者の高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし、各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力、判断力、表現力等も重視して評価を行うものとする。」に基づき、本年度の「地学基礎」追・再試験の試験問題について、報告書（本試験）14ページに記載の八つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

出題内容や出題範囲については、ほぼ教科書の内容に沿って構成されており、「宇宙における地球」「変動する地球」の両項目から、おおむね学習指導要領の定める範囲内で出題されていた。分野別に見ると、「固体地球」から1問、「岩石・鉱物」から2問、「地史・地質」から3問、「大気・海洋」から3問、「天文」から4問、「環境・災害」から2問出題された。やや分野別の偏りが見られたが、第1問Aの間1を「天文」ではなく、「固体地球」の内容からの出題とみなせば、各分野とも出題数は2～3問となり、分野別の偏りはなかったとみなすことができる。設問によっては、教科書には十分な記述がないものが見られた。ただし特定の教科書への偏りはなかった。

内容については、共通テストの問題作成方針にのっとり、基礎的な知識・技能を問う問題から、思考力・判断力・表現力等を要する問題など、様々な問題内容であった。グラフや図、表を用いた出題については、基本的な知識を問う問題もあれば、かなり細かい知識を問う問題や、思考力・判断力・表現力等や複雑な計算を必要とする、やや難易度が高い問題も見られた。

以下、個々の設問について意見を述べる。

第1問Aの間1は、火星の半径や自転周期についての知識と、地球型惑星・木星型惑星の偏平率の大小を表から読み取り考察する問題である。自転周期と偏平率の関係が、教科書によっては十分に説明されていないので、戸惑った受験者もいたと思われる。ただし問題文中に自転周期と遠心力の関係についての説明が加えられていることから、一定の配慮は感じられた。

第1問Bの間2は、地震発生後の猶予時間とS波の速度から、震源距離を算出する問題である。地震発生後の猶予時間は、問題文に書かれている情報をしっかりと読み込んでいく必要がある。

第1問Cの間3は、爬虫類が陸域に現れてから首長竜が海洋へ進出するまでにかかった時間と、哺乳類が陸域に現れてからクジラが海洋に進出するまでにかかった時間についての知識を問う問題である。爬虫類や哺乳類が繁栄している時期は知っていても、それらが出現した時期や「紀」のレベルの絶対年代を記憶している受験者は少ないと思われ、難易度はやや高い。ただし解答の選択肢の年代がそれぞれかなり離れていることから、厳密に記憶していなくても解答可能になるように選択肢の工夫はされている。

第1問Cの問4は、問3の設問に関連して、両者の時代で重なる時期に起きたできごとの知識を問う問題である。三畳紀～ジュラ紀境界の大量絶滅や、裸子植物の出現時期は、教科書の本文中に明確な記述がない。要求される地質時代についての知識が細かすぎ、難しく感じた受験者が多かったと思われる。共通テストの「地学基礎」の問題として、そこまで厳密な知識を要求する必要があるのか疑問が残る。また、問3・問4とも爬虫類と哺乳類の出現時期を知らないという解答できない問題であり、必要とされる知識が重なる出題は好ましくない。

第1問Dの問5は、深成岩の色指数に関する問題である。色指数と酸化物の量比についての理解が求められる良問である。

第2問Aの問1は、飽和水蒸気量のグラフを読み取り、その値を降水量に換算する計算問題である。これまでに見られなかった問題形式であるが、単位体積あたりの水蒸気量で答えるよりも、実際の降水量に直して考えさせる方が実生活に即しておりよい。計算が複雑になることから、やや難易度が高いものの、グラフを読み取る力と計算力の両方の力を見ることが出来るバランスの良い問題である。

第2問Bの問2は、南極周極流は、教科書の図には記載されているものの、本文中では述べられておらず、偏西風との関係も触れられていない。戸惑った受験者が多かったと思われる。

第3問Bの問2は、宇宙誕生直後の物質の生成に関する、基本的な知識を問う問題であるが、選択肢の設定がやや安易である。

第3問Bの問3は、宇宙誕生から38万年後に水素原子が形成されることと、空気塊が上昇して雲が形成される現象についての共通点について考察する問題である。分野横断的な出題になっており、問題作成の工夫を感じる。しかし宇宙膨張に伴う温度低下と空気塊の断熱膨張とを結び付けるのは斬新な発想であるが、受験者は問題の設定を理解するのに時間がかかったと思われる。

第4問の問1は、台風通過に伴う風向きの変化から、台風の経路を考察する問題である。同心円状に風が吹くことを意識すれば経路Aを導き出せるが、中心に向かって斜め方向から風が吹き込むことを意識すると、経路Dが答えになってしまう。台風の規模や気圧も不明であり、実際の台風が設問の設定通りの風向きになるのか疑わしい。経路A～Dのモデルを単純化しすぎではないか。また、「地学基礎」においては台風に吹き込む風については十分に扱わないので、台風に吹き込む風についての説明文や図があれば正答率は向上したと思われる。

第4問の問2は、高潮に関する基本的な知識を問う問題である。しかし海陸風についての記述が一部の教科書には見られないことから、戸惑った受験者がいたのではないかとと思われる。

3 分量・程度

大問4問構成で昨年度と同様であった。小問数は15と変更はなかったが、一つの小間で二つを選択肢から選ぶ問題が出題されたことから、解答番号数は一つ増加し16となった。設問数や問題文の長さは標準的だが、細かい知識を要する問題、複雑な計算を要する問題、問題の設定を理解するのに時間がかかる問題等が見られたことから、解答時間が不足した受験者もいたものと推察する。各設問の配点については3点または4点で、2点あるいは5点の設問がなく、適切である。

選択肢数は4択が14問、5択が1問であった。5択問題は五つの選択肢の中から適当なものを二つ選択する形式であったが、難易度には影響を及ぼしていないものと判断した。

また、観察、実験に関する設問が、昨年度の本試験及び追・再試験ではそれぞれ2問みられたが、今年度の追・再試験では1問（第1問Dの問5）であった。思考力・判断力・表現力等を育成することは地学教育においても不可欠であるため、観察、実験に関する設問は今後も積極的に出題して

いただきたい。

難易度についてはA（平易）が4問，B（標準）が7問，C（やや難）が4問，D（難問）が0問と分析した。昨年度の追・再試験はA（平易）が6問，今年度の本試験においては7問とそれぞれ分析されており，比較的平易な試験であった。しかし，今年度の追・再試験では，細かい知識を要する問題（第1問Cの間3，同問4），複雑な計算を要する問題（第2問Aの間1），問題の設定を理解するのに時間がかかる問題（第3問Bの間3），教科書によっては十分な記述の無い問題（第2問Bの間2，第4問の間2），出題意図どおりの解答になるのか疑わしい問題（第4問の間1）が見られたことから，昨年度の追・再試験や本年度の本試験と比較してやや難化したと言え，平均点も低下したものと推察する。

分野による難易度の差については，地史・地質分野や，大気・海洋の分野の問題にやや難易度が高いと思われる問題（第1問Cの間3・間4，第2問Aの間1，第4問の間1）があった。一方で，環境・災害分野の問題では，一般常識で解答可能と思われる平易な問題（第4問の間3）も見られた。分野による難易度の差が比較的大きかったと思われる。

4 表 現・形 式

大半の設定問は，分かりやすい表現が用いられており，理解しやすいものであった。しかし，受験者が戸惑ったのではないかと懸念される表現が一部見られたので以下に挙げる。

第1問Bの間2の問題文，「緊急地震速報が地震の発生の20秒後に出され，新幹線が停止するには60秒かかるとする。」という表現は，地震発生から停止までが60秒なのか，緊急地震速報発令から停止までが60秒なのかが受験者に分かりづらいのではないかと懸念される。

第1問Cの間4は，四つの選択肢のうちの一つ（三畳紀～ジュラ紀境界の大量絶滅，裸子植物の出現時期）が，教科書の本文中には記述がない内容からであった。教科書の本文中に記述のない内容を，正解の選択肢にしていることは好ましくない。

第4問の間1は，問題文中で台風の規模や中心気圧，通過時間等について一切触れられていない。また，台風に吹き込む風についての説明文や図もなかった。考察するに当たっての条件設定についての記述や記載が不足していたのではないかと懸念される。

形式については，項目判断：該当する項目を選択する設問，文章判断：該当する文章を選択する設問，計算：計算が主体となる設問の3項目に分類した。項目判断は9問であり，本試験よりも多い。文章判断は4問であり，本試験よりも少ない。計算問題は2問であり，本試験と同じであった。

選択肢のほとんどが4択になっているのは好ましい。ただし二つの用語の組合せ問題は，2択×2択の組合せになることから，半分の選択肢は容易に選択でき，実質2択状態になっている問題が多い。

5 ま と め（総括的な評価）

・高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストでは，「地学基礎」の教科書におおむね準じた内容から，基本事項の知識・理解の習得だけでなく，文章や図表，グラフから情報を読み取り，地学的な思考力・判断力・表現力等を見る問題が出題された。高等学校では，基本事項の知識・理解の習得とともに，文章の内容を正しく理解する力や，図表やグラフをきちんと読み取る力を身につけさせることで，思考力・判断力・表現力等を深めさせたい。また，探究活動による観察，実験を積極的に行い，観察，実験の手法の習得や仮設の設定，観察，実験の記録や資料から考察する力などを身につけさせたい。さらに，話し合い活動や発表等を通じて，「地学基礎」の学習が現代社会の諸問題，特に自然災害や

地球環境問題に密接に関わっていることを意識させたい。

・意見・要望・提案等

上記のように検討した結果を、前述の観点から次のように要約し、今後の試験問題の作成に対し、提案・要望を行う。

- (1) 教科書に基づく基礎的な内容の知識・理解を重視しつつ、地学的な思考力・判断力・表現力等を見る出題もなされていた。ただし厳密な知識を問う出題が一部見られ、配慮が必要である。
- (2) おおむね学習指導要領に基づく「地学基礎」の内容、範囲から出題されていた。
- (3) 特定の教科書への偏りはなかった。
- (4) 観察、実験に基づく場面設定がなされた出題も含まれていた。
- (5) 設問数、配点、設問形式は適切であった。
- (6) 文章表現はおおむね適切であった。用語については、教科書に十分な記述がない出題が一部見られ、配慮が必要である。
- (7) 問題の難易度の程度は、本試験と比較してやや高かった。

現代社会の解決すべき課題の多くに、地学的な事物・現象が含まれている。現代社会の諸問題の解決に対応できる人材を育成する観点でも、今後ますます地学教育の重要性が高まることは間違いない。しかし高等学校で地学を専門とする教員は限られているのが現状である。よって「地学基礎」の授業は、専門外の教員も多く授業をしている。専門外の教員は、教科書に十分な記述のない内容までは積極的に教えずらい上、他社の教科書と比較研究している余裕もない。教科書に十分な記述のない内容からの出題が今後増え続けていくと、地学を専門としない教員が「地学基礎」の指導を忌避することにつながり、せっかく増えてきた「地学基礎」の履修者離れを招きかねず、地学教育の重要性を社会にアピールする機会を喪失につながりかねない。

もし教科書に十分な記述のない内容からの出題がやむを得ないと判断された場合は、問題文中に十分かつ明快な説明を加えていただくことや、図やグラフ、写真などからの読み取りから判別できるように、使用する教科書による有利・不利が発生しないような工夫をお願いしたい。ただしその際は、「地学基礎」の学習に積極的に取り組んだ受験者の力が反映されるような出題内容にさせていただき、一般常識や中学校までの学習内容で得た知識のみで解答可能な出題は避けていただきたい。

最後に、各方面から寄せられた意見や要望を真摯に受け入れ、内容を詳細に吟味され、熱意をもって問題を作成された問題作成委員の諸先生方のこれまでの御努力に対して深く敬意を表したい。次年度以降も引き続き意見や要望を積極的に問題作成に反映していただき、適切な難易度かつ良質な作問をお願いしたい。

地 学

1 前 文

学習指導要領には、「地学」の性格は、『地学基礎』との関連を図りながら、更に進んだ地学的方法で自然の事物・現象を取り扱い、観察、実験などを通して地学的に探究する能力と態度を身に付けさせるとともに、地学の基本的な概念や原理・法則の理解を深めさせ、科学的な自然観を育てる科目である。」とある。また「地学」の目標は、「高等学校理科の目標を受け、「地学基礎」の学習を踏まえて、地学的な事物・現象に対する関心や探究心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、地学的に探究する能力と態度を育てるとともに、「地学」の基本的な概念や原理・法則の理解を深め、科学的な自然観を育成することである。」とある。

また、共通テストの趣旨は、「大学に入学を志願する者の高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし、各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力、判断力、表現力等も重視して評価を行うものとする。」である。

評価に当たっては、上記の学習指導要領の性格・目標及び共通テストの趣旨に基づき、本年度の「地学」追・再試験の問題について、報告書（本試験）14ページに記載の八つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

出題内容や範囲については、学習指導要領の定める範囲内であり、おおむね教科書に準じた内容で構成されていた。小問別に本試験と比べてみると「地球の概観」に関する設問が1問から2問、「地球の活動と歴史」に関する設問が13問から11問、「地球の大気と海洋」に関する設問が6問から7問、「宇宙の構造」に関する設問が等しく7問、項目横断的な設問が1問となっており、教科書によって取扱いに差が見られる題材もあるが、特定の教科書への偏りはなかった。

内容については、基本的な知識の組合せやその正誤判断、観察、実験や探究活動についての理解や科学的思考、数学的处理能力を用いた判断、図表やグラフを読み取り科学的な思考に基づく洞察、新しい傾向の問題など、思考力・判断力・表現力等が必要となる設問となっていた。特に第1問に関しては、ハワイをテーマとした項目横断的な内容になっており、受験者の学力を様々な観点から評価できるように工夫されていた。第2問～第5問に関しては思考力・判断力・表現力等を要する内容もあったが、全体的には解答しやすい問題であった。ただし、一部の設問には授業で十分に扱われない題材が見られた。

以下、個々の設問について意見を述べる。

第1問 問1はホットスポット起源の火山島・海山列の配置からプレートの動きについて考察する標準的な問題である。図中の値から太平洋プレートの移動速度を算出させる点に工夫が感じられる。

第1問 問3は海洋の浮遊ごみに注目した上でエクマン吹送流について知識・理解を問う、工夫が感じられる良問である。受験者に海水の動きと環境問題との関連性に気付かせる点も評価できる。

第1問 問4は観測地点の緯度と天体の高度に関する理解を問う問題である。高校ではあまり扱わない内容であるが、図があるため考えやすくなっている。

第1問 問5は宇宙、大気、固体地球の分野における地学現象について考察させる問題である。

「下線部に注意して」と示している点は、受験者にとって分かりやすい表現であり、工夫が感じられる。

第2問B 問2は図を見ながらジオイドと鉛直線方向に関して考察する問題であり、地下に周囲より密度の小さい層が分布している場合を扱っている点に工夫が感じられる問題である。

第2問B 問4は地震のエネルギーについての説明を理解した上で、マグニチュードが2違うとエネルギーが1000倍異なるという知識を添えて考察する良問である。モデルではなく、実際に発生した地震を扱っている点にも工夫が感じられる。

第2問B 問5は岩石密度の算出だけでなく、色指数と岩石名との関連についての知識・理解も併せて問う良問である。

第3問A 問1は地質図から、断層の傾斜の方向と運動の向きを考察する問題である。岩脈の形状が板状ではなく円錐状である点が特徴的で、教科書によく見る典型的なものとは異なる点に工夫が感じられる。貫入岩体の立体的なイメージを持つことが求められ、難しい問題であると思われる。貫入岩体の周辺部に接触変成岩の形成領域を設定することで、より高等学校での学習に即した設定となると思われる。

第3問A 問2堆積構造と地層の上下判定に関する標準的な問題である。ただ、現実には、選択肢にある全ての堆積構造を観察できる露頭を見つけるのは困難だと考えられる。

第3問A 問4はマグマの冷却過程における鉱物の晶出順序と、化学組成変化について考察する標準的な問題である。生徒の実際の活動を想定するという工夫が感じられる。

第3問B 問5は超大陸パンゲアが形成されていたことを支持する事柄に関する知識を問う問題である。パンゲアの形成時期や動植物の出現などの年代に関する知識が必要になるため、やや難しい問題であると思われる。

第3問B 問6はジュラ紀の示準化石について問う問題である。高等学校での実習を踏まえると、スケッチや写真から選択する設定も考えられる。

第3問B 問7は東アジアの気候要因について、ヒマラヤ周辺の地形から考察させる問題である。教科書には「チベット高原の存在が偏西風波動を強める」との明確な記載はないため、戸惑った受験者がいたと思われる。

第4問A 問1は500hPaの等圧面天気図から等圧面高度の東西分布を読み取る良問である。二次元と三次元の情報のやり取り（相互互換）を問う点に工夫が感じられる。

第4問A 問2は等高線が混み合っているところは気圧傾度力が大きいことと、地衡風は等高線に対して平行に吹くことを用いて図を読み取る標準的な問題である。

第4問B 問3は断熱減率についての知識を問う問題である。選択肢については、乾燥断熱減率と湿潤断熱減率のグラフを選ばせることや、発展してフェーン現象を考えさせるなどして、より深く思考する力を問うものも考えられる。

第4問C 問4は大気の大循環についての知識をもとに、図を読み取って潜熱輸送について考察する良問である。問題文は要点が簡潔にまとめられたものになっており、工夫が感じられる。一方で、簡潔すぎて問題文の意図を正しく読み取れなかった受験者がいたかもしれない。

第4問C 問5は海水の塩分に影響する気象現象（ここでは降水）についての知識をもとに、図を読み取る標準的な問題である。

第5問A 問2は年周視差に関する標準的な問題である。3.26光年よりも大きな値の選択肢が一つしかないので、選択肢の設定に工夫があるとよいと思う。

第5問B 問5は活動的な銀河に関する知識を問う問題だが、比較的細かい知識を問われている印象を受ける。

第5問B 問6はグラフの読み取りと、記述の論理的解釈を組み合わせた良問である。グラフは教科書にあるものでない点が考察を促している。グラフの縦軸が対数目盛になっている点に戸惑った受験者がいたかもしれない。一方で、地学を履修していない受験者でも遜色なく考察して正答を選べる可能性が高いとも言える。

3 分量・程度

大問は5つ、設問数は28問で構成されており、本試験と比較すると設問数が1問増加した。知識・理解を問う設問は8問、知識を基に思考・考察する設問は10問、図表やグラフなどから読み取り・思考する設問は7問、観察、実験に基づく設問は3問であると分析した。観察、実験に基づく設問はもっと多くても良いと思う一方で、高等学校での授業時間等の制約を現実的に勘案すると、全体としての分量は適切であったと思われる。

各設問の配点については3点又は4点で、適切である。

主要な選択肢数は本試験と同じ4択で、4択の小問数は本試験と同じ26問であった。これ以外には、本試験では6択が1問であったのに対して、8択が2問となった。8択は受験者にとってはやや難しく感じられ、正答を選べた受験者は多くなかったように思うが、選択肢数の構成はおおむね適切であった。

難易度についてはA（平易）が5問、B（標準）が10問、C（やや難）が12問、D（難問）が1問と分析した。本試験と比べて、難易度はおおむね同等であったと考えられる。正解を三つ答える設問が4問、二つ答える設問が12問あり、問われている事象についてより深く、より広い知識・理解が求められたが、難易度はおおむね適切であった。C（やや難）が12問と多めで、D（難問）が1問と少なめだったとの分析から、C（やや難）の設問数を減らしてB（標準）とD（難問）を増やしてもよいだろう。D（難問）は2～3問程度が適切だと思われる。

4 表現・形式

受験者が出題意図をとらえ易いよう設問は平易に表現され、半数近くの設問に図表やグラフが用いられるなど、全体的に工夫が感じられる。

形式については、項目判断：該当する項目を選択する設問、文章判断：該当する文章を選択する設問、計算：計算が主体となる設問の3項目に分類した。項目判断は18問、文章判断は4問、計算問題は6問という構成になっている。項目判断がやや多いと感じるも、試験時間を考えると、今回の構成は妥当と思われる。

第1問はハワイをテーマとした項目横断的な問題である。設問相互の関連性は希薄だが、総合科学たる地学の特性がよく表れている点に工夫を感じる。また、受験者にとって見慣れない図やグラフを用いた問題は、受験者に新たな気付きをもたらし、柔軟な思考を引き出すきっかけとなったと思われる。例えば、第1問 問3の海上風の分布と浮遊ごみの集積海域の図や、第3問Aの深成岩体の貫入を示す地質図、第5問Bの銀河の星形成率と含まれる恒星の総質量の関係を示すグラフがそれに当たる。地学を学ぶことを通して身に付けた図表やグラフを読み取る力を発揮して、正答を模索していくことは、学問を修める過程における楽しみでもあろうと思う。

5 ま と め（総括的な評価）

- ・高等学校の授業改善への影響

「地学」の基本的な概念や原理・法則の理解を問い、科学的な自然観の習得を確かめる良問が多かった。知識・理解を問う設問、思考・考察する設問、図表やグラフを読み取る設問、観察、

実験に基づく設問の全てにわたって出題された。また、一つの事象や事柄を多面的に捉え、総合的に理解しようとする姿勢が問われた。

高等学校では、知識・理解や思考・考察に偏らず、図表やグラフを読み取ったり描いたりする力をしっかりと身に付けさせることを大切にしたい。また、文章の内容を正しく理解し、応用できる力を身に付けさせたい。

第3問 問2の堆積構造に関する設問については、本来なら野外実習を通して習得させるべきだが、様々な事情から実施が難しい学校も少なくないだろう。せめて、画像やモデル実験を用いて授業を構成したいところである。

第3問 問3の岩石薄片の検鏡に関する設問については、授業において岩石薄片の作成とまではいかなくとも、偏光顕微鏡を用いた岩石プレパラートの観察及びスケッチは実施したいところである。

理科の科目である以上、観察、実験に基づく設問の数が増えていくことを期待したい。

・意見・要望・提案等

上記のように検討した結果を、前述の観点から次のように要約し、今後の試験問題の作成に対し、提案・要望を行う。

- (1) 問題作成方針を踏まえて、知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題の出題も含め、バランスのとれた出題となっていた。
- (2) 学習指導要領の範囲内から出題されており、特定の分野・領域に極端に偏っていなかった。
- (3) 問題で使用される資料等が、特定の教科書に偏っていなかった。
- (4) 高等学校における学習の過程を意識した問題の場面設定がなされた問題が含まれており、その場面設定が、教科・科目の本質に照らし必然性のある形で出題されていた。
- (5) 試験問題の構成は適切であった。
- (6) 文章表現・用語は適切であった。
- (7) 問題の難易度はおおむね適正であった。

「地学」受験者数の低迷が常態化している。日本の国土の特性から、自然との共生や防災の視点から地学教育の重要性は疑いようがないと思われるが、共通テストの結果を利用する大学側の都合もあり、他科目を選択する受験者が多いことも仕方のないことなのかもしれない。今後も、問題作成に当たっては平均点を6割程度にするための努力をしていただきたい。

地学は総合科学であり、地球温暖化やエネルギー問題、自然災害の深刻化などを鑑みると、地学を学ぶ必要性は一層高まっている。地学の問題は、これらの問題に最前線で当たられている方々が作成されていると推察される。教科書の内容を逸脱してはならないが、高等学校の教員の目線でなく、より高等な教育機関や研究機関の方々の目線で作成された設問は大変興味深いものであり、共通テストの趣旨である「大学に入学を志願する者の高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし、(以下省略)」にふさわしいものになると期待している。それぞれの設問が各分野の立場で成立しながら相互に関連合っている、あるいは表面的には分かり難いが深奥でつながっているなどと気づいた受験者は、この問答を楽しみながら正答を選ぶことができるだろう。

最後に、高等学校教育現場関係者から提案した意見や要望等を真摯に取り入れ、熱意をもって作問に取り組み、共通テストへの強い意気込みが表れた問題を作成された委員の諸先生方のこれまでの御努力に対して、深く敬意を表したい。